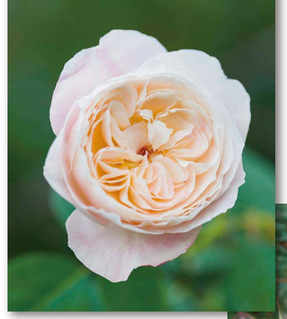
Be My Style

ひと・わざ・みらいへ

現代のライフスタイルにふさわしい発想と感性で、
湖国にCoolな風を起こすものづくりの秘密に迫ります。

野の花のような可憐な「和ばら」
世界で一番幸せになる花を育てたい

「日本から世界に発信していくことを考えて、調和する"和"の美意識を表現する『和ばら』と名付けました」と健一さん。農園の花はすべて父・啓司さんのオリジナル品種。



「『葵(あおい)～風雅～』(写真右)『環(たまき)～美空～』(同上)は大好きなばら。息子たちの名前にもなっています」と健一さん。

ばらは花の色や形だけでなく、香りにも個性がある。気品のある高貴な香りやティー(紅茶)系の香り、エキゾチックな香り、柑橘系の香りなどさまざま。

自然の力にゆだねて
繊細で生命力のある
「和ばら」を咲かせる

ばら栽培の温室に一歩足を踏み入れると、たっぷり〝緑〟の匂いを含んだ潤いのある空気に全身が包まれた。細い通路には一面にばらの落ち葉が散り敷かれ、ふわふわと柔らかな土を踏む感覚が心地いい。通路沿いにうつむき加減に咲いていた白いばらをのぞきこんだ瞬間、やさしい芳香が胸元に流れてきて思わず深々と息を吸い込む。一輪のばらに見惚(みと)れているうちに、日常の喧噪(けんそう)は意識の外へ遠ざかる。

「花そのものの姿形だけでなく、一番大事なのは農園全体の空気感だと思っているので、心地いいといっていただけるととても嬉(うれ)しいです」と、「ROSE FARM KEIJI」代表の國枝健一さんは、ばらの花を確認しながら爽やかな笑顔を見せる。

「この農園のコンセプトは『より自然に』。といっても、自然を目指しているのではなくて、花が美しいとはどういうことなのかを究極まで追求していった結果、花が自然に育つ姿が一番美しいと私たちは考えました」と健一さん。

効率よく花が収穫できるように化学肥料をたくさん与える養液栽培(水耕栽培)が現在の日本では一般的だが、國枝さん父子はあえて土に植えて緑の枝葉をたっぷり生い茂らせることで、生命力のある強い花を育てている。

「森では植物が病気になったり枯れたりしてもそのまま。それでも森はなくならない。環境に調和して自ら育つ力が自然にはある。ばらも同じなんですよ」

この農園で栽培されているのはすべて、健一さんの父・啓司さんが生み出したオリジナルの「和ばら」。啓司さんは健一さんが生まれた年から育種(品種改良)に取り組み、今では微妙な色合いや咲いた姿、香りもさまざまな50品種を出荷する。いずれも啓司さんの世界観を反映しているため、収穫した色とりどりのばらを無造作に束ねただけで絵のように美しい。

ところで「和ばら」とは?

「日本らしい美意識や文化を表現したいという思いで、父のオリジナル品種に名付けました。例えば、建築にしても日本では材質のゆがみをそのままうまく使っていたりしますよね。無理に加工せず、ありのままを大切にする文化。あるいは、余白を空想させる日本的な美意識である〝間〟。そういう文化的背景を内包して他の花や洋風の空間にも調和し、一輪でも存在感がある。それが『和ばら』です」

ROSE FARM KEIJIの温室。「農園遠足」以外は公開していないが、今秋には守山市の湖畔近くに一般の人が楽しめる新しいばら園がオープンする。

ばら職人 國枝健一さん

ROSE FARM KEIJI

ばらの新種をつくり出す育種家が日本では珍しかった35年前から、こつこつと品種改良を重ねてきた國枝啓司さんの農園「ROSE FARM KEIJI」は守山市にある。10年前に息子の健一さんが帰郷してからは父子で新たな「和ばら」の世界を構築。野原から摘み取ってきたような繊細で愛らしい「和ばら」の世界をのぞいてみましょう。

健一さんが「杏」と命名した「和ばら」。花の個性もいろいろ。

「和ばら」のこだわり ここがひと味違う！

空気感

「花の色や形の美しさはもちろんのこと、温室の造りや育て方、見せ方…農園のすべてが父であるばら作家・國枝啓司の価値観の結晶。農園全体の空気感を何よりも大切にしています」と健一さん。

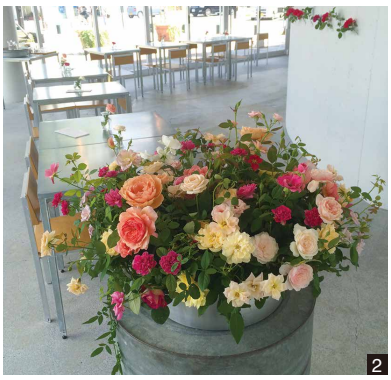
土作り

牛ふんの堆肥とばらの葉などで作った土は多様な微生物がたくさんいることでふかふか、空気も水もよく通る。化学肥料を使わず自然に近い環境で育てて、華奢（きゃしゃ）だけれど生命力のある花を咲かせる。

色合い

何色とも呼べないような微妙な色合いのばらは、咲きながら日々色を変化させていく。「さまざまなグラデーションができるピンクをたくさん作ってきました。これからは赤系統も増やしていきます」と啓司さん。

1



2

1：「育種を始めて35年。花のイメージを思い描いて交配し種を作り、それを土に植えて花が見られるのは1年後。イメージ通りの花ができるまで25年かかりました。どの花もかわいい我が子。好きなことを仕事にできて本当に幸せです」と穏やかな笑顔で話す啓司さん（左）。

2：守山駅近くに昨年秋にオープンした「WABARA café」。広々としたシンプルな空間に繊細な「和ばら」の美しさが映える。素材や作り方にこだわった紅茶やコーヒー、スイーツが揃い、ワンオーダーに「和ばら」が1輪つくサービスがうれしい。

昔はばらに無関心!? 贈られた人の笑顔に触れ「和ばら」を世界へ発信

「和ばら」という名称を考えたのも、一般的な農法である養液栽培から手間のかかる土耕栽培への転換を提案したのも健一さんだ。しかし実は、祖父の代からのばら栽培農家に育ったにもかかわらず、健一さんは当初ばらにまったく興味がなかった。目指していたのはプロのサッカー選手。2年間ドイツにサッカー留学し、帰国後は東京で就職した。

「東京で働いていた時、たまたま父が育てたばらを贈り物として手渡す機会があって、相手の方がものすごく喜んでくれたんです。意外に生産者は花を受け取った人の反応を見る機会がないんですよ。ばらはこんなにも人を幸せに、笑顔にできるものなんだって新鮮な驚きでした」

かねてから起業したいと考えていた健一さんは、これをきっかけに父の仕事を継ぐことを決意。まず、全国の著名なばら農家、市場、花屋などを訪ね、良いとされるばらと流通の現場を見て歩くことから始めた。その中でいいなと感じたばらはすべて土で栽培されていることに気づく。

「土耕栽培は、自然の持つ本来の力を信じながらも、しっかり分析・検証もされている。そのバランス感覚が自分の好きなサッカーと似ていて、すごく共感できたんですよ」

健一さんが就農した10年前には2品種だった「和ばら」は50品種に増え、お披露目を待つ新種がまだまだたくさん控えているという。昨秋は守山市に「WABARA café」をオープンしたほか、海外への事業展開も始まった。さらに、一般の人が楽しめるより広い温室が守山市に今秋完成する予定だ。

「花のある生活を皆さんにもっと知ってもらいたい。目指すのは『世界で一番幸せになるばら』です！」。父のばらへの深い愛情と息子の情熱に支えられた「和ばら」は今、世界へ向かってぐんぐん伸びている。

DATA

ROSE FARM KEIJI
TEL.080-5713-0909
http://www.rosefarm-keiji.net

WABARA café
守山市勝部1-13-1
あまが池プラザ101
TEL.077-596-3070
http://wabaracafe.rosefarm-keiji.net
★飲食券を5名様にプレゼント。
詳しくは21ページ参照。